

「夢で見たよりも、ずっと綺麗だ！」

見下ろす瞳と目が合つて、額に口づけが落ちる。その視線が恥ずかしくて身を振ろうとすると、両腕を押しさえられて緩やかに拘束された。

「駄目だ、隠さないで見せてくれ」

「や、だつて恥ずかしい……」

まだ、そう大した事をされたと言う訳ではないのに、身体の奥からとろりと熱い物が溢れるのが分かる。

そんなにまで、玄徳に抱かれたかと思つて、顔に熱が上つた。

これでは夢の中で花を抱いていた玄徳だけを責められない。程度は違つたとしても、花も同じ事を考えていたようなものだから。

「……お前はどこもかしこも綺麗だな」

いつの間にか、花の足下に陣取つた玄徳がつま先を持ち上げて口づける。

花が何かを言う前に、足の指を含まれた。熱く濡れた感触が背筋を粟立たせる。

「……っ！」

そんな所を他人に触れられた事も、ましてや舐めら

れた事等ない花は、その何とも言えない感覚に、背筋をぞわりとしたものが這い上がった。

「や、そんなとこ、汚い……」

日頃、畑仕事やらで汚れる所である。勿論、毎日汚れを落としてはいるが、そんな所と言う感覚の方が強かつた。

花は足への愛撫をやめて貰おうと、つい身を起こした事を後悔した。玄徳がじつとこちらを熱い瞳で見つめていたからだ。

「……お前の身体で汚い所なんて無い。どこもかしこも綺麗で、滅茶苦茶にしてしまいたくなる……」

そんな事を言いながら、足の指の股にまで舌を這わせる。そしてわざと花を見つめながら、足の指一本一本にねつとりと舌を這わせていくのだ。

僅かな月明かりの中でさえ、その様子が見て取れる。そんな事をされてしまったら、その蠱惑的な視線から目が逸らせる訳がない。

「……あ」

玄徳の舌は足の指から甲、踝を通つてふくらはぎに。触れていない所が無いような丁寧さで舌を這わせてい